



|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | 新訳をめぐる翻訳批評比較  |
| Author(s)        | 佐藤, 美希  |
| Citation         | メディア・コミュニケーション研究 = Media and Communication Studies, 57: 1-20                    |
| Issue Date       | 2009-11-09  |
| Doc URL          | <a href="http://hdl.handle.net/2115/40054">http://hdl.handle.net/2115/40054</a> |
| Type             | bulletin (article)  |
| File Information | MSC57-001.pdf   |



[Instructions for use](#)

# 新訳をめぐる翻訳批評比較

佐藤美希

## 0. はじめに

現在の日本の翻訳文学界では、新訳が盛んに出版される一種の「新訳ブーム」とも言える状況が見て取れる。1996年の『失われた時を求めて』（鈴木道彦訳）、97年の二種類の『ユリシーズ』（丸谷・高松・永川訳、柳瀬尚紀訳）、そして2003年の村上春樹による『キャッチャー・イン・ザ・ライ』といった新訳出版が、現在のブームの火付け役となったと考えられているが<sup>1</sup>、その後も2006年に光文社古典新訳文庫、2007年に河出書房新社が初訳・新訳を中心に据えた世界文学全集の出版を開始し（両者とも刊行継続中）、新潮文庫や岩波文庫でも相次いで新訳をラインナップに加えるなど、新訳ブームは現在も進行中である。売り上げ部数を見ても、『キャッチャー・イン・ザ・ライ』は2007年までで約35万部<sup>2</sup>、2006年から出版された光文社古典新訳文庫の『カラマーゾフの兄弟』は、光文社によれば、2008年9月11日現在で全5巻累計100万部以上など<sup>3</sup>、不況といわれる近年の出版業界の中では特筆すべき部数を示している<sup>4</sup>。これに比例して、そうした新訳に言及した翻訳書評や翻訳論も後を絶たない。

こうした新訳出版ブームが生起する背景として考えられるのは、次の三点である。第一に、原文テキストの改訂や誤訳の訂正、テキストへの新たな解釈や研究成果などを翻訳に反映させる必要性。第二に、例えば著作権の期限切れや（2005年6月に著作権が切れた *Le Petit Prince* は、その直後の二年間だけで14種類もの新しい日本語訳が出版された<sup>5</sup>）、出版社や学会の動向といった何らかの外的要因。第三に、ある状況下で翻訳とはどうあるべきと考えられているかを示す「翻訳規範」の変化。この変化には第二に挙げた翻訳の外的要因も関係する。新訳出版や

---

1 『論座』2007年9月号の「なぜいま新訳なのか」（pp.184-185）という記事の中で、新訳出版ブームの状況が記述されている。

2 同上 p.184

3 光文社古典新訳文庫ウェブサイトより <http://www.kotensinyaku.jp/news/content18.html>（2009年6月9日確認）

4 出版科学研究所によると、インターネットの普及や少子化の影響で、1996年以降、出版物の推定販売額は減少が続いている。（「名作の復刊・新訳ブーム」読売新聞2007年9月5日）

5 加藤晴久（2007）『憂い顔の「星の王子さま」』 pp.5-15

それをめぐる翻訳書評の活発化は今に始まった現象ではないが、以上の三要因を考えると、新訳出版をめぐる状況がその時期・時代に依りて異なるのは明らかであり、現在の状況には何らかの独自性があるはずである。

本論では、『赤と黒』『カラマーゾフの兄弟』それぞれの新訳をめぐる提示された翻訳書評を例に取りあげ、先に挙げた三つの要因の中でも特に翻訳規範の変化という観点から、現在の新訳ブームの特徴について、その一端を明らかにすることを試みる。筆者は両作品の原語であるフランス語とロシア語を解さないため、原文テキストと翻訳テキストを詳細に比較検証する能力はなく、本論では翻訳テキストの分析は行わない。本論はあくまで翻訳論や書評という翻訳の外的テキストをもとに、どのような翻訳観が新訳ブームを形成し、そうした翻訳観に対してどのような反応が示されているのか、といった翻訳の外的状況を主題とするものであり、翻訳テキストそのものの善し悪しの評価や、翻訳とはいかになされるべきかを規定することが本論の目的ではないことを最初に断っておきたい。

## 1. 翻訳規範と方法論

翻訳規範とは、翻訳研究(Translation Studies)の先駆的研究者ギデオン・トゥーリー(Gideon Toury)が社会学で論じられる「規範」をもとに提起した概念で、翻訳に関して「あるコミュニティが共有している一般の価値ないし考え——何が正しく何が誤りか、何が適切で何が不適切か——を、特定の状況にふさわしく、適用可能な作業指示」として示したものである(Toury 1995: 55)<sup>6</sup>。トゥーリーはこの概念の適用によって、ある時期や分野などの翻訳状況を記述し、そこに適用されている翻訳規範を同定する「記述的翻訳研究(DTS——Descriptive Translation Studies)」という方法論を提示した(Toury, *Ibid.*)。この方法による考察を積み重ねることによって、それまで個々の翻訳事象が個別に分析対象とされてきた翻訳研究の体系化が可能になったと言える。また、エドウィン・ゲンツラー(Edwin Gentzler)も指摘しているように、この方法論によって、翻訳は単なる一対一の言語変換の問題から、目標文化(target culture)側が翻訳する時の様々な制約を含めた社会文化的な問題として主題化されるようになり、近年の翻訳研究の一つの傾向を作り上げる契機になった(Gentzler 2001: 131)。

翻訳規範を抽出するために、トゥーリーは実際の翻訳テキスト(textual source)と翻訳外テキスト(extratextual source)という二種類の分析対象を提示している(Toury 1995: 65-66)。後者に関しては、「翻訳者や出版者、評者、その他の翻訳行為参加者が規範について明示的に述べた発言」と説明され、「そのような明示的発言は不完全かもしれないし、社会文化システムの

---

6 日本語訳は、ジェレミー・マンデイ/鳥飼玖美子監訳『翻訳学入門』に引用された部分を参照した。(マンデイ 2009: 173)

中でそのインフォーマントが果たす役割に引きつけた内容になっているかもしれないため、避けた方がよい<sup>7)</sup>と述べられている。しかし、「社会文化システム」の中で発言される内容が示し得るのは、ある翻訳観が提示される際にそこに含まれている社会文化的な価値観や信条、イデオロギーなどであり (Venuti 1998: 29)、ある翻訳観が規範化される／されない状況をテキスト論の外部からも説明する手助けとなるはずである。そうであれば、翻訳規範の記述を試みる場合、翻訳外テキストは「避けた方がよい」分析対象などでは決してなく、翻訳規範を広いコンテキストで理解するために必要なリソースとなる。

本論では、トゥーリーによる記述的翻訳研究と翻訳規範概念に依拠し、なおかつ翻訳規範をテキスト論よりも広い視点から理解するため、翻訳外テキストとして翻訳書評を例にとり、現在の翻訳ブームの中に表されている翻訳規範の一端を考察していく。

## 2. 新訳『赤と黒』『カラマーゾフの兄弟』書評

### 2.1 『赤と黒』新訳をめぐる

2007年9月と12月に、東京大学准教授である仏文学者の野崎敏による新訳『赤と黒』上・下巻がそれぞれ光文社の古典新訳文庫から出版された。この新訳に対し、スタンダール研究会会報第18号において、立命館大学教授の仏文学者下川茂が「『赤と黒』新訳について」という書評を発表した(2008年5月発行 pp.14-20)<sup>8)</sup>。この書評で下川は、「大小の誤訳の総計は数百箇所に上る」という野崎訳の誤訳・誤解を細かく指摘し、「まるで誤訳博覧会」「前代未聞の欠陥翻訳で、日本におけるスタンダール受容史・研究史に載せることも憚られる駄本である」と糾弾している。下川の指摘では、原文と既訳(中央公論社『世界の文学』所収の富永明夫訳)を引用しながら、その「欠陥」が6頁にわたって説明されている。筆者はフランス語に精通していないが、それでも野崎の誤訳が明らかにわかる箇所もあるほど、実際に単純ミスが多くあることは事実のようである。

下川の書評は、2008年6月8日付けの産経新聞東京版で「スタンダール『赤と黒』新訳めぐり対立 “誤訳博覧会” “些末な論争”」というタイトルの記事として取りあげられたが、その記事には、光文社の文芸編集部編集長である駒井稔による下川への以下のような反論も記載された。

『赤と黒』につきましては、読者からの反応はほとんどすべてが好意的ですし、読みやすく瑞々しい新訳でスタンダールの魅力がわかったという喜びの声だけが届いておりま

7 日本語訳については上記註と同様。(マンデイ2009: 174)

8 [http://www.geocities.jp/info\\_sjes/kaihou/kaihou18.pdf](http://www.geocities.jp/info_sjes/kaihou/kaihou18.pdf) で閲覧。(2009年6月9日確認)

す。当編集部としましては些末な誤訳論争に与（くみ）する気はまったくありません。もし野崎先生の訳に異論がおりなら、ご自分で新訳をなさったらいかがかというのが、正直な気持ちです。（括弧内ママ）

この駒井の発言に対して、下川は2008年6月23日にスタンダール研究会会報の号外として、「追補2」を発表した<sup>9</sup>。その中で下川は、

「誤訳論争」が「些末」だとする駒井氏の発言は、編集者としての責任を放棄するものであり、読みやすさだけを訳者に求める出版社に古典の新訳を出す資格があるとは思えない。

と述べて出版社を糾弾するとともに、野崎が初版第3刷で何ヶ所かの誤訳を「読者に内緒で訂正」するという対応に対しても、次のような厳しい批判を投げかけている。

自ら訳全体を見直すことをせず、人から指摘された箇所だけ「機会に恵まれ」たら訂正していくという野崎氏の姿勢は、翻訳は読みやすければよく、誤訳など「些末な」問題だとする駒井氏と、読者に対する無責任という点で大きな違いはない。

下川の書評からは、学界側が持っている翻訳規範が垣間見えてくる。もちろん、下川一人だけによる翻訳評が学界の認識を代表しているとは言えないが、それでも彼の書評が日本スタンダール研究会の会誌というアカデミアの媒体の中で発表されたということからも、学界側の翻訳観の一例と考えることはできるだろう。

下川が指摘しているのは、「訳し忘れ」、既訳を参照していないと思われる箇所、大小さまざまな誤訳、「原文にない勝手な改行」、「原文にない表現」、「余計な解釈」、「日本語の問題」などであるが、こうした彼の評価基準が明らかに表しているのは、翻訳とはまずもって誤訳のない、原文を精確に訳出したものでなければならないという翻訳観である。その中には、改行から表現に至るまで、原文に忠実な訳出でなければならないという点も含まれており、以下の言及にはそれが明示されている。

原文にない勝手な改行の例も挙げておこう。下47頁の9行目と10行目の間、下86頁の3行目と4行目の間に改行があるが、原文にはない（571、588）。

---

9 [http://www.geocities.jp/info\\_sjes/kaihou/appendice18surRNdeSIMOKAWA.pdf](http://www.geocities.jp/info_sjes/kaihou/appendice18surRNdeSIMOKAWA.pdf) で閲覧。（2009年6月9日確認）

さらに、下299頁の「勝手な崇拜」（原文は《l'adoration qu'elle avait sentie》(679)）の「勝手な」のように、原文にない表現を付け加えて、意味を歪めている例も数多い。下200頁の「俄然」も原文にはない（637）。

余計な解釈を付け加えている箇所も多い。例えば、下179頁の「小市民に似つかわしくない知恵」の原文は《l'adresse de ce petit bourgeois》(628)で、富永訳は「この小市民階級出の男の手腕」である。「似つかわしくない」とマチルドが考えた可能性はあるが、訳文に入れるのは行き過ぎである。

訳出文体に関しても、原文が書かれた当時の文体、または文学作品としての言葉遣いを保持すべきという翻訳観が示されている。

「流行ばかり追いかけて（下122）」と、ジュリヤンはまるで現代の若者のような言葉遣いをする。地の文の翻訳にも「真情のほとぼしる調子には、あっさり聞き流しにくいものがあつた（上430）」・「きつい突っこみ（下149）」・「自然体（下167）」と現代の流行言葉が使われている。こういう文体を現代的で分かりやすく読みやすいと思う人は、一度自身の文学観・翻訳観を点検した方がよい。

さらに、以上のように翻訳があるべき姿ではないならば、それは読者に提供されるべきではない、という強固たる信条も次のように明確に述べられている。

野崎は直ちに現在書店に出回っている本を回収して絶版にし、全面的な改訳に取り組むべきである。一日も早く野崎訳が書店から姿を消すことを私は願っている。便々と前代未聞の欠陥翻訳を売り続けるとしたら、野崎には翻訳者・学者としての能力だけでなく、読者に対する良心もないとみなすことにする。

また、新訳出版の意義という点では、以下のような言及がある。

野崎訳に既訳と比べて優れている箇所がないとは言わない。野崎が「訳者あとがき」で触れているが、プレイアード新版の注を活かした箇所もある。しかし、私が調べた限り、それらを合計してもせいぜい十箇所程度にしかならない。『赤と黒』には本稿で使わせていただいた富永訳をはじめ優れた翻訳が既に存在する。既訳を数百箇所改悪しておいて、十箇所程度の改良では、新訳と称する資格はない。しかも野崎訳の日本語は慣用から外れた間違いだらけの日本語である。

つまり、新訳は既訳よりも優れたものでなければならず、その「既訳よりも優れ」ているかどうかの基準は、誤訳のない正確さ、忠実さという点において測られる、ということである。

以上のように、下川にとって翻訳とは、字句一つ一つを疎かにせず、精確・忠実に原文を置換したものでなければならず、また古典作品の言葉遣いを現代的な文体にするべきではなく、それらを実現できないものは読者に供されるべきではないものである。彼のこうした翻訳観は、上記の一部引用からもわかるとおり、辛辣かつ強硬な姿勢で述べられており、それに反する野崎訳に対する「負のサンクション」として機能している。「サンクション」とは社会学で論じられる概念で、ある行為は規範に基づいて社会に評価されるのだが、それが好意的評価の場合は「正のサンクション」、否定的評価を受ける場合は「負のサンクション」と呼ばれる(盛山1995: 131-133)。下川の翻訳評は、新聞だけではなく Amazon.co.jp の書評に引用されたり<sup>10</sup>、インターネット上のブログなどでも数多く言及されるなど、社会に対して影響力を持ったと考えられる。実際にはそれらを読んだことで野崎訳『赤と黒』を購入したという読者もいただろうから、認知度や売り上げに少なからず貢献したとすれば、実質的には「正のサンクション」にもなったのかもしれないが、少なくとも、野崎訳を「欠陥翻訳」と激しく糾弾する「負のサンクション」として、下川の翻訳観は翻訳「規範」としての影響力を持ったことになるだろう。

実際、下川の翻訳評は、英文学翻訳の場合においても常に支配的な翻訳規範として提示され続けてきた翻訳観と一致する。英文学作品の翻訳においては、明治以来の長きに渡って英文学者が中心となって翻訳し、翻訳論を展開することによって、英文学研究の学問的規範、すなわち原文を一字一句に至るまで精確・忠実に解釈・理解する姿勢を翻訳に反映させることが、翻訳規範として提示されてきた(佐藤2008a; 2008b)。特にその規範が支配的に確立した大正一昭和初期などは、『英語青年』などの研究専門誌上で、この規範に違背する翻訳について誤訳部分を細かく取りあげる精緻な誤訳指摘がなされたり、書評で厳しく批判されたりということが繰り返され、規範が再生産され続けた(佐藤2008c)。こうした「一字一句までの忠実さ・精確さ」を重視する英文学翻訳規範は、翻訳観の具体的な内容の変化を経ながらも、またその規範と異なる様々な翻訳観が対抗概念として提示され続けながらも、現在でも英文学翻訳を取り巻く至る所で見ることができる。

一方、下川評に真っ向から対立した光文社側の発言は、下川の翻訳観を「規範」とするならば、その規範に対抗する新たな翻訳観の提示と考えることもできる。光文社古典新訳文庫は、次のような出版意図のもとに、2006年9月に創刊された。

10 2008年6月8日に投稿された書評。

[http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4334751377/ref=sr\\_1\\_2\\_cm\\_cr\\_acr\\_txt?ie=UTF8&showViewpoints=1](http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4334751377/ref=sr_1_2_cm_cr_acr_txt?ie=UTF8&showViewpoints=1) (2009年6月9日確認)

長い年月をかけて世界中で読み継がれてきたのが古典です。奥の深い味わいある作品ばかりがそろっており、この「古典の森」に分け入ることは人生のもっとも大きな喜びであることに異論のある人はいないはずです。しかしながら、こんなに豊饒で魅力に満ちた古典を、なぜわたしたちはこれほどまで疎んじてきたのでしょうか。

ひとつは古臭い教養主義からの逃走だったのかもしれませんが。真面目に文学や思想を論じることは、ある種の権威化であるという思いから、その呪縛から逃れるために、教養そのものを否定しすぎてしまったのではないのでしょうか。[中略]「いま、息をしている言葉で」——光文社の古典新訳文庫は、さまよえる現代人の心の奥底まで届くような言葉で、古典を現代に蘇らせることを意図して創刊されました。気取らず、自由に、心の赴くままに、気軽に手に取って楽しめる古典作品を、新訳という光のもとに読者に届けしていくこと。それがこの文庫の使命だとわたしたちは考えています<sup>11</sup>。

原典に対する忠実・精確さを守ろうとする姿勢が、上述した英文学の翻訳がそうであったように、学問的な「教養主義」「権威化」の態度の翻訳だとするならば、そしてそのために「古典」が「疎んじ」られるのならば、その「教養主義」「権威化」とは異なる翻訳を世に問う（そして翻訳文学の出版市場を拡大する）、ということが光文社の新訳出版の意図であることは理解できる。しかし、もちろんこれは下川のような立場の翻訳観とは真っ向から対立する。下川は古典の翻訳で現代風の言葉遣いを選択することに強硬に異を唱えていたが、古典新訳文庫のキャッチフレーズである「いま、息をしている言葉で」という姿勢は、まさに彼の翻訳観とは対照的な翻訳意図である。このように下川の翻訳の評価基準と光文社の出版意図とは、初めから全く相容れないものなのである。

## 2.2 『カラマーゾフの兄弟』新訳をめぐる

『赤と黒』新訳と同じ光文社の古典新訳文庫から、2006年9月から2007年7月にかけて、ロシア文学者で東京外国語大学学長の亀山郁夫による新訳『カラマーゾフの兄弟』（以下『カラマーゾフ』）全5巻が出版された。本稿冒頭で述べたように、この新訳はわずか2年あまりで売り上げ100万部を突破する、新訳ブームの代表とも言える作品となっている。実際にこの新訳を取りあげた特集記事や書評は数多く、その読みやすさや新たな作品受容を生み出した功績などに言及する好意的な評価も多い<sup>12</sup>。

しかしその一方で、この亀山訳に対しては、「ドストエーフスキイの会」という研究会の代表、千葉大学名誉教授の木下豊房らが中心となり、彼の個人ウェブサイト上で誤訳指摘と辛辣な批

11 この文言は、古典新訳文庫の全作品の巻末に掲載されている。

12 毎日新聞2007年7月29日「今週の本棚：沼野充義評『カラマーゾフの兄弟』」などはその一例。



判を表明している<sup>13</sup>。そのウェブサイト上では、木下が同会の会員や一般の読者ととも亀山訳の誤訳箇所を指摘し、原文および先行訳（米川正夫訳、原卓也訳、江川卓訳）と照応して「検証」「点検」し、詳細に解説している<sup>14</sup>。他にも、同サイト上では、木下による批評だけではなく、一般のドストエフスキー愛読者や翻訳者による、亀山の『カラマーゾフ』解釈の不備・誤解、翻訳姿勢などを徹底的に糾弾する論考も、リンクの形式で読むことができる。

筆者はロシア語を解さないため、誤訳の「検証」作業が妥当なものかどうか判断はできないし、繰り返すが、その指摘の是非を判断することは本論の目的ではない。本論では、この新訳書評がどのような視点から翻訳を問題視しているのかのみに焦点を絞って木下らの批評を見てみたい。そこで気がつくのは、まず第一に、彼らが誤訳という場合、『赤と黒』を評した下川同様、一字一句まで詳細に検証した上で、語義や文法の一つをも忽せにしないという立場から厳密に指摘していることである。ここでも原文への忠実性、原文の精確な置換ということが翻訳を評価する第一の基準となっていることがわかる。

第二に、誤訳の指摘とともに亀山の学者としての作品解釈への批判と、出版社、さらにはロシア文学研究界への批判が、翻訳の問題とともに語られているということである。例えば、以下のような批評はその一例となるだろう。

誰もが気がつくのは、先行訳が、表現の違いはあれ、原文に忠実で、語学的にほとんど一致している個所で、亀山訳に限っての誤訳が目につくということである。また作品の文脈から生じる解釈にあいまいさ、不正確さが見られることである。この原因はどう解釈したらよいのであろうか？ 訳者の語学力に起因するのか、それとも、もともと出版社の集団的なプロジェクトで、読みやすさをねらうあまりのリライト作業の結果、専門的な立場からの最終的なチェックが効かなかったことによるのか、推測の限りではない。マスコミでの亀山訳の持ち上げられかたからすれば、先行訳をもしのぐ決定訳のような印象すらあたえられかねない。この新訳は、読書会で、また学生の書く論文の引用で、スタンダードたりうるであろうか？ 亀山訳に魅せられ、愛読した読者にこそ、この検証作業を捧げたい。かならずや先行訳を参照し、できるなら、ロシア語原文と照合していただきたいものである<sup>15</sup>。

---

13 <http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost125.htm> (2009年6月9日確認)

14 「亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を検証する —— 新訳はスタンダードたりうるか？」(2007年12月24日付) <http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dos117.htm>、「一読者による新訳『カラマーゾフの兄弟』の点検 (2008年2月20日付) <http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost120a.htm>、「亀山訳『カラマーゾフの兄弟』第1冊、誤訳・不適切訳点検補遺」(2009年5月5日付) <http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost130.htm> (すべて2009年6月9日確認)

15 「亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を検証する —— 新訳はスタンダードたりうるか？」(2007年12月24日付) <http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dos117.htm>

このような文体歪曲に伴う誤訳がその他にも数多く見られる（逆接―順接の問題など）のも、複数の立場からの発話が交差するドストエフスキーの文体、すなわちそれぞれの主体の発話の指向性を的確に見極めきれていないからである。これはドストエフスキー作品の翻訳者の資格としては致命的なことである。

亀山氏は自分の翻訳の底本としてあげた原文のほかに、明らかに自分流のテキストを作ってしまった。読みやすいという幻想を生み出しているのは、この自分流のテキストと戯れているからである。

日本のロシア文学翻訳の歴史は二葉亭四迷の身を削るような苦労からはじまった。「原文にコンマが三つ、ピリオドが一つあれば、訳文にもまたピリオドが一つコンマが三つという風にして、原文の調子に移さうとした」というのは二葉亭の言葉であるが、原文と真剣に向かい合うという姿勢は一貫して先人翻訳者たちが受け継いできた伝統であったはずである。亀山氏がいかに苦労話を語ってみても、その残された結果が裏切っている。彼の偽装に幻惑されて、理由もなく彼を偶像に仕立てあげ、読者を欺く行為に手を貸しているメディア、ジャーナリズム、書評家、作家達の社会的責任は大きい<sup>16</sup>。

木下の立場からすれば、亀山の誤訳と、チェック機能が働かずにその誤訳を許してしまう出版社、また亀山の解釈の不備や彼独自の解釈による「歪曲」と、それを糾弾せずに彼の訳業に高評価を与えるメディアや書評家たちは即座に結びつく。さらに木下は、日本ロシア文学会にも亀山訳について公開討論会の開催を依頼したが却下されたこと、また日本人ロシア研究者が亀山訳について批判していないことについても、研究者の実名を挙げて異議申し立てを行っている<sup>17</sup>。このような翻訳外部のシステムに関する言及については、『赤と黒』を評した下川も光文社古典新訳文庫の在り方を問う発言を行っていた。翻訳が実際には出版ビジネスやメディア、研究制度の中に位置づけられていることは明らかであるし、そうした視点からの批評は的を射た発言であり、日本の外国文学受容においては無視できない問題である。にもかかわらず、従来の新訳書評においては、翻訳とその外的要因がこれほど明確に結びつけられて論じられることは、これまで一般的ではなかった。

以上のような、『赤と黒』『カラマーゾフ』それぞれの新訳をめぐる翻訳観の対立は、一見したところ、明治以来連綿と繰り返されてきた忠実訳／自由訳、起点テキスト志向／目標テクス

16 木下豊房「亀山郁夫氏の「踏み越え」（《преступление》）——『カラマーゾフの兄弟』テキスト改ざんと歪曲の疑い」<http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost120e.htm>（2008年2月20日付）（2009年6月9日確認）

17 木下豊房「—— 亀山問題の現在 —— アリョーシャの「あなたじゃない」の解釈をめぐるさらなる重大なテキスト歪曲と誤訳 —— 木下和郎氏のブログ「連絡船」に寄せて ——」（2008年8月20日付）<http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost128.htm>（2009年6月9日確認）

ト志向といった二項対立の翻訳論と同様に見えるかもしれない。しかし、上述したような翻訳外部のシステムへの言及が翻訳論に組み込まれていることは、翻訳規範形成における新規性であり、従来の翻訳論のような単純な二項対立の議論にはとどまらない論点を示している。こうした現在の新訳をめぐる翻訳観の新規性をより明確化するために、次節では過去の新訳をめぐる議論をいくつか取りあげて考察していく。

### 3. 過去の新訳をめぐる議論

#### 3.1 トルストイ新訳（1979年）をめぐる

1978年から翌年にかけて、北御門二郎による新訳でトルストイの『戦争と平和』『アンナ・カレーニナ』が出版された。北御門は晴耕雨読の生活をしながらトルストイに私淑し、20年以上にわたって独自にトルストイ作品研究と翻訳を進めてきた市井の研究者・翻訳者である。この新訳に関して、東京外国語大学で教鞭を執るロシア文学者の原卓也が『朝日ジャーナル』11月16日号に「トルストイ翻訳の現代的意味」(65-67)と題する書評を掲載した。それに対し、翻訳者である北御門が同12月14日号で「原卓也氏に答える形で」(41-43)という反論を行った。この二人のやりとりは一種の翻訳論争として取りあげられることもある程、よく知られた論争である。

原は、北御門の新訳が「北御門訳で読むと、これまで他の翻訳ではわからなかった個所がずらりとわかる」(本多秋五郎)と評されていることを受け、既訳と北御門訳を比較した上で次のように述べる。

「彼は夢の目醒めを夢の長さに比較したほど、生の目醒めを生の長さに比較して、格別おそいとは思わなかった」(米川訳)

「そして生の長さに比してそれからの目ざめは、夢の長さにくらべた夢からの目ざめより、緩慢なものとは思われなかった」(筆者〔原〕訳)

「そして彼には、つかの間の夢からの眼醒めがあっけないように、人生という比較的長い夢からの眼醒めも同じようにあっけないような気がした」(北御門訳)

だれが読んでも北御門訳がはるかにわかりやすい。本多氏の言を借りるなら、まさに「快刀乱麻で、一目瞭然の訳」である。だが、ここでわたしは、文学作品の翻訳は「一目瞭然」であればそれでいいのかという疑問をあえて提起せざるを得ない。原文を引用できないのが残念であるが、トルストイの書いたこの数行の文章のいったいどこに「束の間の」とか、「あっけない」という言葉があるのか、わたしには分からない。第一、原文は「思われなかった」と否定形で書かれているのである。[中略]

北御門氏はトルストイ特有のこのねちっこい文体もリズムもまったく無視して、語学的

にはそれこそ誤訳といわれても仕方のないほどの思いきった意識をしているのだ。

ロシア文学の翻訳に関する限り、わが国では「原文にコンマが二つ、ピリオドが一つあれば、訳文もその通りにする」という二葉亭にはじまり、あくまでも直訳主義の中村白葉氏、日本語をして読みやすいものにするためには、場合によっては息の長い原文を二つ、三つの文章に区切ることもやむを得ないとする米川正夫氏ら、大先輩の遺業が存在している。そして今や、なるべく原文のスタイルやリズムを尊重して翻訳し、そこから作者の思想を探ろうという試みすら行われるようになってきていることを考えるなら、読みやすさをもっぱら追求しようとした北御門氏の訳に対して、残念ながら、わたしは首をかしげざるを得ないのである。

この書評からは、二葉亭四迷以来のロシア文学翻訳の規範、つまり原文にできるだけ忠実という翻訳規範を見いだすことができる。同時に、この規範の背後には、精確な語学力に裏打ちされた精緻な原文理解を前提とする文学研究の姿勢も見取れる。原によれば、北御門の新訳はこの規範に則っておらず、「読みやすい」というだけでは翻訳の在り方として疑問だという立場を主張している。原自身ははっきりと、「自分は原文密着主義」であると述べ、北御門の訳業とは相容れないことを表明しているのである。

これに対して北御門は、「時には字句を超越した意識が必要だ」というトルストイの意見を引用し、次のような翻訳論を表明する。

記号や音声としての、換言すれば現象形体としてのロシア語の奥には、本有としての言葉、即ちもはやロシア語でも日本語でもない言葉そのもの、カント的表現では物自体（ディング・アン・ジッチ）としての言葉があり、仮にそれをxとすれば、訳者は原作の中からこのxを読み取らねばならず、その上でそれを日本語という現象形体に移植しなければならないのです。ところがこのxがうまく読み取れない時、訳者は往々にして単なる語学的操作に頼ってしまって、これが主語、これが述語と、ロシア語から日本語へ一直線といった手抜き工事（？）が行なわれて、結果はたしかに否定形は否定形に、命令形は命令形になっていても、訳者自身にも何のことやらさっぱり分からぬ文章がでっち上げられるのです。[中略]トルストイの文章がいかにもねばっこくとも、彼は決して訳のわからない文章は書いていないはずです。

私たちは彼の著作を翻訳するのに、もし彼が日本人に生まれ、日本語で書いたらこうも書いたであろう、というものに極力近づく努力を惜しんではならないはずです。日本のどんなへぼ文士でも、あの米川訳や原訳のようなチンプンカンプンな日本語で書くでしょうか？ トルストイの原作からxを読み取り、そのxを日本語に直してはじめて、二重の濾過作業によって、いわゆる語学的には形は変わっても、本質的には原作の精神

を正確に捉えた訳文が生まれると思うのです。

以上のような原と北御門の論争は、従来の翻訳論で語られ続けている、いわゆる「不実な美女」と「貞淑な醜女」というメタファーで語られるような、翻訳の二項対立の議論を踏襲している。ただし、この二項対立を、職業としての学問人である原の学究的態度と、市井のトルストイ愛好家とも言える北御門の立場の違いであると考えるのは、おそらく適切ではない。というのは、両者の翻訳観や翻訳実践は全く対照的な二項対立を示してはいるものの、両者の根底に共通してあるのは、原典の精確な理解、という原文への忠実という視座に他ならないからである。その意味ではむしろ、両者とも原典志向であり、原典への学究的な姿勢という点では立場を異にしてはいないのである。

こうした二項対立は、例えばこのトルストイ新訳の約20年後に出版された二編の『ユリシーズ』新訳についても当てはまる。この翻訳は、丸谷オ一・高松勇一・永川玲二訳『ユリシーズ』（1996-1997）と柳瀬尚紀訳『ユリシーズ』（1997）として同時期に刊行されたのだが、両者の翻訳態度の違いはあまりにも明白である。前者は訳註を大量に付すなどして、翻訳ではわかりにくい原文の内容の伝達、研究によって可能になった新たな解釈の情報提供、先行訳の不備や誤訳の補足などに力を注ぎ、精緻な学問としての英文学研究の成果としての翻訳作品となっている。一方の柳瀬の翻訳は、訳註は付さず、日本語の言葉遊びを駆使し、必ずしも原文一字一句の置換再生にはこだわらずに、原文のリズムや韻を日本語によって再構成するという方法で、それまで支配的であった翻訳規範に対してかなりラディカルな翻訳を行っている。柳瀬は自分の翻訳論の中で、丸谷他訳は原文の精確な意味合いを伝え切れていないことを、自分の翻訳や原文と比較対照しながら指摘している（柳瀬2000：136-174）。この柳瀬の指摘は、原文密着で字句に拘泥するよりも原作の精神の精確な解釈とその日本語テキストとしての再構成を目指す翻訳観と見なすことができる。彼は日本語としての再構成を重視するという点では、上述の北御門の翻訳観以上の専心を見せているが、そうした翻訳でこそ精確な原典理解を反映させることができると主張する。原文に拘泥する丸谷他訳に対して否定的な見解を述べる姿勢は、すなわち、一見極めてラディカルな翻訳戦略を採用していながら、翻訳の本質に関しては、原文の忠実な再構成を求めるという点で丸谷ら起点テキスト志向派と出発点を同じくしている。その意味では、原-北御門論争と同様、起点テキスト志向という土俵の中での翻訳規範をめぐる二項対立の議論を踏襲したものと言えるだろう。

### 3.2 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（2003）

以上のような二項対立の評価基準に基づく翻訳論争、特に新訳をめぐる議論における変化として、2003年に出版された村上春樹訳『キャッチャー・イン・ザ・ライ』（以下『キャッチャー』）と、それをめぐる翻訳批評を一例と考えることができる。『キャッチャー』にはすでに定訳・名

訳としての確固たる地位を獲得している野崎孝による先行訳『ライ麦畑でつかまえて』（1964）（以下『ライ麦畑』）があり<sup>18</sup>、両者を比較する翻訳評も数多く発表されている。

しかし、新訳『キャッチャー』をめぐる翻訳批評において、上記のような一字一句までの忠実さ・精確さを求める翻訳観と、原作の解釈と日本語としての再構成に重きを置く翻訳観との二項対立の翻訳観はほとんど議論されていない。もちろん、アマゾン（Amazon.co.jp）の書評など、一般読者によるものも考慮すれば、そうした一字一句の訳にこだわる書評もあるのだが、『キャッチャー』刊行当初に雑誌や新聞紙上でこぞって発表された、いわゆるプロの書評としての翻訳評において主眼とされているのは、村上の作品解釈の問題や村上独自の文体の問題などであり、『ライ麦畑』との比較もその点に集中している。いくつか例を挙げる<sup>19</sup>。

訳者の新たな解釈が反映され、時代の変化がわかる翻訳

（「文化 批評と表現」毎日新聞夕刊2003年5月1日）

村上春樹の神経質な文体は、この小説の新たな読み方にうってつけだ

（「読書」評：中条省平 朝日新聞2003年5月11日）

今回二つの訳を比べて感じたのは、若者の語彙の流行り廃りはともかくとして、野崎訳が意外に古びておらず、いまでも相当な力を持っているのではないか、ということだった。それに対して、村上訳は現代的な語彙をちりばめてはいるが、基本的には作家自身の文体の中でホールデンを造形した、という印象を受ける。[中略]この新訳はすでにベストセラーになっていると聞くが、訳者の名前に惹かれてサリンジャーを手にとった村上ファンの若い読者も多いに違いない。そのようにして古典は新しい読者を獲得し、新しい翻訳を通じて新たな意味が生み出されていく。

（「今週の本棚」評：沼野充義 毎日新聞2003年5月4日）

一見してわかるように、これらの書評は皆、村上による新たな解釈の提示や彼独自の翻訳文体を非常に好意的に評価している。しかし、村上も明言しているように、この翻訳は一字一句忽せにしないという従来の翻訳規範に必ずしも則ったものではない（村上・柴田2003：53）。に

18 『キャッチャー』刊行直後に発行された白水社の「出版ダイジェスト」によると、2002年までに『ライ麦畑』は累計250万部の売り上げがあり、アメリカ文学のベストセラーとなっている。また、この訳のキャッチコピーにも「歴史的な訳」と書かれるなど、日本の翻訳文学では確固とした地位にある作品になっていることがわかる。

19 ここに挙げた以外にも、「特集：サリンジャー再び——村上春樹訳を読む」『文學界』2003年6月号、284-304；『文藝春秋』2003年7月号、356-358などの書評も同様の書評を掲載している。

もかかわらず、この新訳の書評にはそうした部分への批判や指摘はほとんど見あたらない。村上自身も、従来の二項対立の翻訳観に基づく言及は行っていない。

村上春樹という人気ベストセラー作家による翻訳という話題性を考えるならば、文学研究の成果としての翻訳を前提とするような従来の翻訳規範に基づく批評は、おそらくこの新訳の書評としては的を外すだろうし、そうした議論がなされないのは合点がいく部分もある。しかし、上に引用した書評の評者である中条（学習院大学教授）や沼野（東京大学文学部助教授一当時）といったアカデミアの研究者からも、原典の作家以上に翻訳者の個性が表出される点を好意的に評価する翻訳観が提示されるという状況は、アカデミアがそれまで再生産し続けてきた原作への忠実さという翻訳規範に依拠する姿勢が、従来ほど厳密に主張されていない例として考えることができる。そうした意味では、新訳『キャッチャー』の出版とその受容は日本の翻訳文学における重要な転換点であった。

#### 4. 現代の新訳批評の意味

村上訳が「新たな読者層をひらき、新訳の商業的な成功の可能性を示した」後、出版社側は文学作品の新訳出版に積極的になった（朝日新聞2007年10月26日）。出版社の姿勢として、従来強固に守られてきた忠実・精確という翻訳規範に依拠する姿勢以上に、読者に対してこれまでとは違う新しい息吹を感じさせる翻訳テキストの提供が重視されるようになる。2005年の朝日新聞に掲載された記事の中で、こうした新しい翻訳文学の出版傾向について、各出版社が以下のように述べている。

[2005年に『冷血』『ドン・キホーテ』『ロリータ』の新訳を出版した] 新潮社は、[中略]「文庫よりも単行本の方がインパクトが大きいの。名作を3作出すことで事件にしたい。新たな読者が十分につく作品」と胸を張る。[中略]

老舗（しにせ）の岩波文庫は従来、よい翻訳者が見つかった機会などに訳を更新してきたが、ここ5年は新訳を出すべき作品を洗い直している。[中略]よく売れている作品ほど、どんどん新しくする方針だ。「半世紀も経（た）つと、日本語も常識も変わる。古典は若い読者に読んでもらいたいが、古い版のままでは、岩波文庫は活字がぎっしり詰まっています。訳が古めかしい、と宣伝するようなものですから」[中略]

新訳を大きな市場とらむ動きも出てきた。光文社は[中略]「先を急ぐばかりの20世紀が終わり、今は混迷の時代。読者は本質的なものへと向かっている」と語る。長い時間を経た古典は最も外れがない娯楽だが、翻訳には賞味期限がある、という位置づけだ。

（「名作の新訳、刊行ラッシュ 若い読者にわかりやすく」

朝日新聞2005年10月22日 括弧内ママ）

これらの出版社が、新訳出版に当たって読者にアピールできるという点を重要視しているとは言っても、「忠実・精確」という従来の翻訳規範を無視したり、否定しているわけではないだろう。ただ次の点は指摘できる。つまり、以前の文学翻訳をめぐる言説は翻訳者や研究者（文学作品の翻訳は研究者が行うことが多いことは先述した）による書評や訳者コメントなどが大多数であり、彼／彼女らが依拠していたのは、それまで文学翻訳をめぐる繰り返して再生産されてきた「忠実・精確」という翻訳規範を中心とする二項対立の翻訳観であった。しかし、村上訳の成功、あるいはそれ以前からの古典新訳の傾向を背景に、新訳市場が注目されるようになったことにより、この新訳市場開拓を重視する出版社側の翻訳意図が、影響力を持つ一つの翻訳観として新たに提示されはじめたと考えることができるのである。

二項対立の翻訳観の再生産にのみ牽引されてきた従来の翻訳規範形成からのこうした変化は、その後の新訳評にも引き継がれている。例えば、2008年に発表された柴田元幸による新訳『ナイン・ストーリーズ』に対して、英文学研究の専門雑誌である『英語青年』2009年2月号（8-9）で、北海道大学准教授の竹内康浩は、新しい読者にアピールできる翻訳という点を以下のように好意的に評している。

『ナイン・ストーリーズ』の出版からもう半世紀以上たつ。訳文はどの時代にフィットさせるべきか。[中略]「キレる」に加えて「それってひどくない？」や「作っただけ」などの表現からも、訳語は戦後間もない頃ではなく現代東京に照準されていることが分かる。これは、翻訳に賞味期限はつきものだという訳者の翻訳観の表れであり、その潔さは尊重されるべきだと思う。

では、以上のような文学翻訳の新潮流の背景と照応するとき、現在の新訳をめぐる言説として本稿で取り上げた『赤と黒』の新訳論争や『カラマーゾフ』新訳への批評については、どのように説明できるだろうか。

学究的な厳密さから『赤と黒』や『カラマーゾフ』新訳が原文に忠実ではないことを辛辣に批判する下川や木下らの態度と、光文社が「読みやすさ」という点に主眼を置いてそうした厳密な翻訳観に対立する構造は、一見したところ旧来の翻訳観の二項対立を示す原一北御門論争を踏襲した議論の構図に見える。たしかに、北御門のトルストイ新訳に対して「原文密着主義」の立場から批判する原と、下川や木下による厳密な学究的立場からの新訳批判は、忠実・精確という従来の翻訳規範を共有している。しかしながら、一方のトルストイ新訳の北御門と光文社古典新訳文庫が掲げる翻訳観は、読みやすい日本語で書くことや思い切った意識の試みを重視している点で、表層的には共通しているものの、絶対的に異なっている点がある。前章で述べたように、北御門はあくまで原文の精神を翻訳で表現することを目的としており、その意味では原典の忠実な置換を強調する原と同様に、また下川や木下同様に、原典志向であることに



変わりはない。他方、古典新訳文庫は、もちろんこのシリーズにラインナップされているすべての翻訳作品がそれを体現していると断言することはここではできないが、少なくとも先に引用した出版意図を鑑みれば、学問的な（社の言葉を借りれば「教養主義」、「権威的な」）視点からの翻訳観・翻訳規範に確信犯的に挑戦するような姿勢、つまり、アカデミアが志向する原典重視の翻訳観に真っ向から対峙するという意向から、「読みやすい」翻訳が推進されているのである。

現在と過去の新訳論争の差異としてもう一つ言えることは、読者の存在のとらえ方である。原と北御門の論争においては、あくまで翻訳者同士が互いの翻訳手法について議論するのみであって、この議論で問題になるのは、原文と対峙する翻訳者の姿勢のみであった。読者の存在に主眼が置かれることはない。つまり、翻訳者が、原典を損なわずに、どのようにアウトプットするかが両者の翻訳観の焦点であった。しかし、現在の新訳論争においては、下川や木下も、そして光文社も、読者が必要としているであろうアウトプットの在り方を彼らが考えていることを明確に示している。下川や木下（そして木下とともに亀山訳を検証した一般読者や別の翻訳者も）は、それまでの学究的な視座を反映した翻訳規範を尊重し、精確な『赤と黒』や『カラマーゾフ』が読者に提供されることこそが翻訳のあるべき姿であると考えている。一方、光文社側は、そうした「教養主義」で「権威化」された翻訳のありようではなく、読者が「気取らず、自由に、心の赴くままに、気軽に」手に取れる古典の翻訳を望んでいるのではないかという新たな視座から出版を意図している。

以上のように、『赤と黒』『カラマーゾフ』をめぐる翻訳の議論は、出発点から相容れない志向に基づくものであり、論争は平行線をたどる他はないだろう。過去の新訳をめぐる論争も、平行線であることに違いはなかったが、ただ、「原文への忠実」という立脚点は共有されていた。それに反して、現在の議論は立脚点そのものが共有されず、全く別の論理のもとで翻訳観が提示されている点に、現在の新訳批評の特徴の一端を見ることができる。

しかし、逆説的にいえば、新訳をめぐるこのように全く異なる翻訳観が提示されていることは、新たな翻訳観から提示される新訳と、既存の翻訳規範を体現する（はずの）先行訳の両者の受容を活性化させることにもつながるのではないか。少なくとも、現在のインターネット社会の中で、読者にはこうした翻訳論争を知る機会には十分にある。読者が自分の求める翻訳を選択し、両方を入手して読み比べ、翻訳評を自分で検証するという積極的な翻訳受容の機会は、このような新訳の議論を契機として、むしろ拡大していると考えることができる。現在の新訳ブームといわれる状況は、このような複数の、全く相容れない翻訳観が同時に提示されていることによって牽引されているという要因も、一部にあると考えられるのである。

さらにもう一つ、現在の新訳論争について特筆しておきたい点がある。『赤と黒』『カラマーゾフ』の書評において、その二項対立を論じる構図の中に、出版社の方針、アカデミア内部の問題、読者といった、翻訳という場に参与している存在が明確に書き込まれているという点で

ある。翻訳をめぐるそれらのあり方への問題意識がこれほどに顕著なものは、筆者の知る限りは、以前はほとんど見られなかった。

上述したように、原一北御門論争では、主題となっていたのは翻訳者がどのように原典を翻訳するかという問題だった。批評し合っていたのも翻訳者本人であって、批評の中に組み込まれていたのはあくまで翻訳者（学者としてのありようも含めて）と原典の関係、つまり翻訳者が原作者の作品をいかに訳出するかであった。しかし現在の新訳批評においては、批評しているのは翻訳者本人ではなく学者（または読者）、そして（『赤と黒』の場合のみだが）それに答えているのは出版社であり、翻訳批評に表れている翻訳という場の構成が原一北御門論争とは全く異なっているのである。新訳の訳者である野崎も、亀山も、筆者の調べの及ぶ範囲では、批評に対する公的なコメントは出していない。過去における新訳がなされる状況に出版社やアカデミアなどの外的コンテクストが実際は具体的にどのように関わっていたかは本論では考察できないため、過去の状況について言及することはここではできないが、少なくとも、現在の新訳論争に関しては、批評の中にそうした外的要因が書き込まれていることは、翻訳批評の内容ひいては翻訳状況の大きな変化を示していると言えるだろう。

これは、本章冒頭でも述べたように、2003年の村上訳『キャッチャー』の成功によって、市場拡大をめざす出版ビジネス側の翻訳意図が、学究的な視座を基盤とする従来の翻訳規範をめぐる二項対立の翻訳観とは異なる翻訳観として提示され始めたという変化と呼応する。こうした翻訳をめぐる状況の変化に対応して、従来の翻訳規範を再生産しようとする議論においては、出版ビジネスに対抗できるはずのアカデミアについても言及することは当然の流れと考えられるだろう。

このように翻訳の場における多様な参加者の存在が翻訳規範の形成においてクローズアップされていることも、現在の翻訳状況の重要な特徴の一つであろう。これまでは、翻訳の場にこうしたビジネスや読者の存在が実際にあったにもかかわらず、アカデミアや翻訳者ばかりが主たる翻訳規範の形成を担ってきた部分があるのだが、今後はおそらく、新たにクローズアップされてきた出版社の翻訳意図の提示や、それらを積極的に受容できると考えられる読者の存在が、翻訳規範形成において無視できない要素になっていくのではないだろうか。

## 5. おわりに

現在の新訳批評におけるいわゆる「翻訳論争」において、翻訳に対する立脚点がそもそも全く相容れない翻訳観が主張されていること、そこでは規範とそれに敢えて対抗するような翻訳観が対置されることや、翻訳規範の形成を担うファクターが従来とは異なりつつある、という一端が見えることを、以上の考察から窺い知ることができた。

ただし、今回の考察では、翻訳批評の流れを見る上でフランス文学、ロシア文学、英米文学

作品への批評を同じ土俵に載せて分析したため、それぞれの背景としてある文学研究や出版状況の違いを考慮していないことが、外国文学翻訳のコンテキストを精確に理解する上で不十分である点は否めない。今後、各国文学別の翻訳状況やコンテキストのより精緻な分析を進めたい。

木下や下川が指摘しているように、光文社側の誤訳訂正のやり方をはじめとする、初歩的なチェック作業の有無や、出版ビジネスの商業主義的姿勢などは、翻訳文学のためには再考される余地がある。その一方で、既存の翻訳規範である「忠実さ・精確さ」のみを絶対視し、翻訳テキストの定訳化、スタンダードになり得る翻訳だけを真正化することだけが翻訳文学の目指す方向とも限らないのかもしれない。ここまで考察した『赤と黒』や『カラマーゾフ』の新訳とそれに対する二項対立的な書評が示しているような、全く相容れない翻訳観が併存する中で、読者が翻訳を選択し、また一つの作品にとっての翻訳を定訳化せず、複数のテキストを受け入れる素地ができるのならば、それは明治以来の日本の翻訳文学の歴史の中でも、新たな翻訳状況が生まれる可能性を秘めているのかもしれない。「誤訳だらけ」の新訳であっても、それが既訳の特長を浮き彫りにして再評価を促す可能性もあるし、あるいは逆にそれまで考えられなかった作品解釈を提供するような契機となる可能性もある。

『キャッチャー・イン・ザ・ライ』が話題になった時、巷の書店で村上の新訳と、定訳・名訳としての地位を確固たるものとしていた野崎孝の『ライ麦畑でつかまえて』、そして英語原文の *The Catcher in the Rye* が書棚に並べられて売られていたのは、それまでの翻訳文学の在り方から見ても新鮮な光景だった。古典、あるいはキャノン（カノン）と呼ばれて日本の外国文学に根付いている作品が新訳される意義の一つは、原点への忠実さ・精確さという規範を体現して定訳とされる翻訳テキストも、それとは異なる翻訳観からなされる挑戦的な新訳も、共に読者に供されて、読者が日本で外国文学作品を読むことの多様な可能性を享受できる道が広がることかもしれない。

#### 【参考文献】

- Gentzler, Edwin, (2001) *Contemporary Translation Theories* 2nd edition. Clevedon: Multilingual Matters  
Munday, Jeremy, (2008) *Introducing Translation Studies* 2nd edition. London and New York: Routledge  
[ジェレミー・マンデイ/鳥飼玖美子監訳 (2009) 『翻訳学入門』みすず書房]  
Touy, Gideon, (1995) *Descriptive Translation Studies and Beyond*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins  
Venuti, Lawrence, (1998) *The Scandal of Translation*. London and New York: Routledge  
加藤晴久 (2007) 『憂い顔の「星の王子さま」』書肆心水  
佐藤美希 (2008a) 「英文学翻訳の翻訳規範に関する一考察——『英語青年』誌に見られる英文学研究及び社会思潮との関係から」(学位取得論文・北海道大学)(未刊行)  
佐藤美希 (2008b) 「昭和20年代の英文学翻訳と英文学研究——『英語青年』誌における翻訳規範の形成とそのコンテキスト」『国際広報メディア・観光学ジャーナル』第7号119-144  
佐藤美希 (2008c) 「昭和前半の英文学翻訳規範と英文学研究」『翻訳研究への招待2』(日本通訳学会翻訳研究分科会編) 11-38

- J・D・サリンジャー／野崎孝（訳）（1964）『ライ麦畑でつかまえて』白水社
- J・D・サリンジャー／村上春樹（訳）（2003）『キャッチャー・イン・ザ・ライ』白水社
- J・ジョイス／丸谷才一・高松勇一・永川玲二（訳）（1996-1997）『ユリシーズ』集英社
- J・ジョイス／柳瀬尚紀（訳）（1997）『ユリシーズ』河出書房新社
- スタンダール／野崎敏（訳）（2007）『赤と黒 上・下』光文社
- 盛山和夫（1995）『制度論の構図』創文社
- ドストエフスキー／亀山郁夫（訳）（2006-2007）『カラマーゾフの兄弟1～5』光文社
- 村上春樹・柴田元幸（2003）『翻訳夜話2 サリンジャー戦記』文藝春秋
- 柳瀬尚紀（2000）『翻訳はいかにすべきか』岩波書店
- 『朝日ジャーナル』1979年11月16日、1979年12月14日
- 『文學界』「特集：サリンジャー再び——村上春樹訳を読む」2003年6月号、284-304。
- 『文藝春秋』「鼎談書評」2003年7月号、356-364
- 『論座』2009年9月号
- 朝日新聞「読書」2003年5月11日、「beReport」2005年10月22日、「秋の読書特集」2007年10月26日、「クリーンヒット」2008年3月29日
- 「出版ダイジェスト」第1907号2003年3月11日
- 毎日新聞「今週の本棚」2003年5月4日
- 毎日新聞夕刊「文化 批評と表現」2003年5月1日
- 読売新聞「名作の復刊・新訳ブーム」2007年9月5日
- 「Amazon.co.jp ウェブサイト」『赤と黒』書評  
[http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4334751377/ref=sr\\_1\\_2\\_cm\\_cr\\_acr\\_txt?ie=UTF8&showViewpoints=1](http://www.amazon.co.jp/product-reviews/4334751377/ref=sr_1_2_cm_cr_acr_txt?ie=UTF8&showViewpoints=1)
- 「管理人・T. Kinoshita のページ」 <http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost125.htm>
- 「光文社古典新訳文庫ウェブサイト」 <http://www.kotensinyaku.jp/news/content18.html>
- 「日本スタンダール研究会ウェブサイト」 [http://www.geocities.jp/info\\_sjes/newpage0.html](http://www.geocities.jp/info_sjes/newpage0.html)

（2009年6月10日受理、2009年9月1日最終原稿受理）

## 《SUMMARY》

# An Analysis of the Current Reviews of Literary Retranslations in Japan

Miki SATO

In this paper I examine the current ‘boom’ in Japanese literary retranslations, in which translators and publishers alike promote alternative theories, strategies and publication policies. I also consider various criticisms and readers’ responses. In order to fathom out this current boom in retranslation, I scrutinize external discourses such as reviews and critiques, as well as consider what translation norms are suggested and how those norms are constructed.

The external discourses consist of critiques and reviews of the recently published Japanese retranslations of *Le Rouge et Le Noir* and *The Brothers Karamazov*. These critiques highlight not only the conflicting ideas on translation, but a shift in the paradigm, in which the actual competing elements of the conflict are different than those of the past.